

世は アンチエイジングの時代。年齢や経験の積み重ねで磨きあげた“成熟からなる美しさ”で輝く女性たちをご紹介します。

THE BEST OF ME

～最高の今を写真で記録する～

She's Story 50歳を迎えて、腹を括って単身赴任した奄美大島でWAMと出会いました。



今月ご登場頂いたのは、養護教諭として、鹿児島市内の中学校に勤務されている米森 良子さん。教師を目指すうちに、受け持ちのクラスだけでなく、学校全体の生徒たちと広く関わりたいとの思いから、養護教諭の道を選ばれました。

初任の勤務地は蘭牟田池近くの小学校。二軒長屋の古い町営住宅での一人暮らしがスタートだった。「お若いのに淋しいでしょう」と隣人の方が、近くにあった会社の寮の新入社員の方を紹介され、その中のおひとりだったご主人と25歳でご結婚。ご主人の会社は県内各地に転勤があり、良子さんも県職員のため、県内各地はもちろん離島勤務の任務もある。2人の息子さんが巣立つまでは、1つの家から通える範囲でやりくりし、下のお子さんの大学進学をきっかけに、単身赴任で奄美大島の名瀬中学校に赴任。その奄美大島がエステWAMとの出会いの地になりました。

「養護教諭仲間3人で食事をしている時に、他の2人はWAM友達だったので、あなたも体験してみない?って教えてくれて、体験に伺ったら、気持ちいいなあと思って…。学校では、元気のない子供たちにハンドマッサージをしてあげたり、リンパの流れを良くし、月経痛を和らげる体操を教えたりするんですよ。元気を取り戻して、頑張ると。そういう時に、私が疲れ果てていたり、神経が行き届いていない状態だと、先生は口で言っていることと実際が違うとなりますよね。多感な年頃の子供たちは、口紅の色ひとつにも気付くんです。先生、昨日と口紅の色が違うね。今日出張?とかって言われます(笑)。そんな子供の反応が自分を元気にしてくれることも多いので、いつもきちんとしていきたい。WAMIに行くことで癒されて、さらに元気になって、パワーを持続できるので、有難い出会いだったなあと思います」

50歳を迎えて、腹を括って単身赴任した奄美大島での5年間。「奄美の美しい風景を見て、目からどんどん元気がもらいました。そして仕事帰りにWAMIに寄って、用事で鹿児島に戻る前には必ず綺麗にして帰る。そんなWAMライフとも呼べる嬉しいリズムのアイランドライフでした」

養護教諭の仕事に就いて30年。昔と今では子供達の悩みの質が変わったといいます。「今は、告白するのも、謝るのもLINEでという時代。顔を見ながら、体温が伝わる距離で相手と解り合うのが苦手だったり、傷つくのが怖くて直接的な触れ合いを避けてしまう。そういう身身の人間関係が非常に希薄になっていて、デジタル化された人間関係の中で、傷ついたり、あるいは悩みを相談したりということが増えてきていますね。謝るけど、既読になっているけど返事が返ってこない—「既読無視」という言葉を子供たちはよく使いますが、毎日のように、そういう相談があります。子供にとって「教室」というのは、ある意味戦場。人の言葉や視線が気になって、朝、登校しても、保健室に寄ってからでないと教室に向えない子もいる。「今日も頑張ってるよ」と、「よく頑張ったねえ〜」って、そういう何気ない関わりを大切にしています」

実際の教育現場でのとても深いお話の数々に聞き入ってしまいました。そして養護の先生の役割に感動するとともに、このお仕事とご家庭の両立はものすごく大変だったのではないかと想像しますが、両立はご自身の強い希望だったのだそう。

「夫とはお互いに支えなりましたが、理解してくれていたのかなと思います。おかげさまで今は、長男も次男も世帯をもちまして、2人共東京で暮らしています。先日、初孫も生まれました。今は孫の顔を見に行くのがとても楽しみです」と、最高の笑顔を見せてくださいました。



anne(アンヌ)はcoletteのお姉さんの存在です

米森 良子 さん(56歳)

Ryoko Yonemori
公務員・養護教諭

Hair&Make担当
AgeeWAM 鹿児島店